対人関係の親密さの変化による対人認知の変容¹

学習院大学 弓 削 洋 子²

The effect of changes in interpersonal closeness on person perception

Yoko Yuge (Department of Psychology, Faculty of Letters,
Gakushuin University, Mejiro, Toshima-ku, Tokyo 171)

The purpose of this study was to investigate changes in person perception due to changes in interpersonal closeness. Immediately after beginning the first semester, four female university freshmen belonging to a student club were asked: 1) to tell what they thought of or knew about three fellow club members (stimulus persons; SPs); and 2) to indicate liking for SPs, and rate them in terms of factors related to interpersonal attraction. The interviews, with the same interviewees and SPs, were repeated seven more times during the following six months. Content of their statements for each SP was analyzed, and results indicated: 1) Liking for SPs was positively correlated with the frequency of statements concerning SPs' disposition, but negatively with that of SP's objective information; 2) the more distant the subject-SP relationship became after initial closeness, the more the frequency of statements about SP's objective information, and the less that of SPs' disposition. It was suggested that self-other relationship had an effect on person perception.

Key words: person perception, interpersonal relations, case study, content analysis.

本研究の目的は、他者の心理的側面についての認知と、自己関係の親密さとの関連性について検討することである。ここでは他者認知を、“主体が他者について考え、その結果、顕在化した情報によって他者を表象すること”と定義した。他者の心理的側面を認知するということは、他者の心理的側面について考えることを意味する。

対人関係と他者認知との関連について、Heider (1958)の認知的均衡理論は、主体は、自分を取り巻く他者と自分との関係を均衡化しようと試みると仮定している。この均衡化は、主体にとって否定的な存在を主体とは異なる単位として区別し、主体にとって肯定的な関係をつくる、自己肯定を目的としていると思われる。更に帰属理論において Heider (1958)は、主体と他者との関係と、他者の行動とが矛盾のないように、主体は他者の行動の原因を内的要因あるいは外的要因に帰属すると言う。他者との関係と他者の行動とが矛盾しないときには、他者の行動の原因を、安定した要因である他者の心理的側面に帰属すると仮定して

いる。

一方で、他者の心理的側面について考えたくない状況も存在する。

社会的促進の研究において、Zajonc (1965)は、作業場面において、観察者としての他者の存在は覚醒水準を高め、緊張をもたらすとしたが、後に (Zajonc, 1980)、他者が自分についてどのように評価しているのかが明らかでない場合に不安になるとした。Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle (1968)によれば、他者から評価されることが覚醒水準を高めるという。更に、Henchy & Glass (1968)は評価されることが不安を生むと仮定しており、Weiss & Miller (1971)が指摘しているように、他者の存在は不安を生む不快で嫌悪な刺激にもなり得ると言える。

Altman & Haythorn (1970)によると、男性を2人だけに隔離して生活させたところ、次第になわばり行動と単独行動が増え、他者との間に“心理的壁”(Altman & Haythorn, 1970)を形成していった。他者の存在が不安をもたらすとき、主体は他者を避け、他者の心理的側面を考えないことによって、他者の存在を無視することも推測される。このとき、主体にとって他者は何も考えていない単なるマニピュラントであって (Heider, 1958)、表面的な特徴しかもたない、物理的

¹ 本研究の一部は、日本グループダイナミクス学会第35回大会において発表した。

² 本研究を御指導下さいました学習院大学永田良昭先生、中村陽吉先生に深く感謝致します。

存在と同レベルの存在と見られることが推測される。他者の考えや評価を考慮しながら行動するよりも、他者を物理的存在としてとらえる方が、他者から受ける不快感を減らすことができると言えるだろう。

Heider(1958)の言うように、自他関係と他者の行動とが矛盾しないことが他者の心理的側面を認知させるという仮説の一方で、他者が不安をもたらし不快な存在であるとき、主体は他者の心理的側面について考えないことも推測される。他者と主体との関係が肯定的であるか否定的であるかが他者認知を規定すると予想される。

本研究では、Heider(1958)の言う対人関係の肯定性・否定性の指標として、自他関係の親密さを取り上げ、自他の関係の親密さが、他者の心理的側面を認知するかどうか規定することを明らかにする。

Altman & Taylor (1973)は、自他関係の付合いの長さによって自己開示情報の内容が変化すること、自己開示情報の内容によって関係の親密さが規定されると仮定している。自己開示の内容は付合いの初期の段階では表面的な情報であり、次第に心理的側面に関する情報を伝えることで親密になり、他者認知も次第に心理的側面の情報が増えるとしている。しかし本研究の目的から見れば、付合いの長さや他者からの自己開示情報にかかわらず、そのときどきの自他の関係の親密さによって、他者の心理的側面を認知するかどうか規定されることも予測される。本研究では、対人関係の親密さが変化していく過程における他者認知の変容を追って、自他の関係と他者認知との因果関係を検討する。

対人関係の親密化過程に見られる他者認知の変容については、Newcomb(1961)は自他の価値観の一致の認知に焦点を当て、今川(1984)は他者の性格について人が暗黙裡にもっている認知的枠組の安定性について検討しており、ともに、認知された心理的側面が内容的にどう変化していくのか検討している。本研究では、他者の心理的側面を認知しているかどうかを検討するので、Dornbusch, Hastorf, Richardson, Muzzy, & Vreeland (1965)のように面接法を用い、他者の心理的側面に限らず、他者についての認知全般を被験者から得ることが望ましいと考えた。

更に本研究では、自他の関係の親密化において、従来の研究で明らかにされている対人魅力の諸要因がどの程度影響しているのか検討するために、自他の態度の類似性の認知、自他の接触頻度および接し方を取り上げた。

方 法

調査方法

本研究では、自他の関係の親密さを、ある程度自分の意志で選択できる場合の関係の形成過程を取り上げた。このような関係が生じる代表的な集団として、大学の文化系クラブを対象とし、クラブ内での対人関係を調査した。

被験者 某4年制大学の文化系クラブ所属の1年生女子4名。この4名は互いに本研究に参加していることは知らない。また、被験者4名と面接者(調査者)とは初対面で、調査期間中、調査以外での接触や、各回調査終了後に話し込むこと等避けて、なるべく個人的に親しい関係になることのないよう配慮した。

調査期間 昭和60年4月上旬の新学期開始から10月上旬までである。約2週間おきに被験者に実験室に来てもらい、1回1時間の面接調査を受けてもらった。被験者には、期間中、調査に全8回参加してもらった。

手続き クラブ内の知人についての調査を行っていると説明し、以下の手順を毎回繰り返した。

1. 面接調査(カセットテープレコーダにより記録)

従来の対人認知研究で見られたように、認知の評定尺度を被験者にあらかじめ提示しておく、それまで考えていなかった他者に関する情報について強制的に考えさせる可能性が高い。従って、本研究では非指示的方法による面接調査法を用いた。

①クラブに加入してから知り合った1年生の名前を知っている限り挙げてもらう。

②挙げてもらった名前の中から5名を面接者(調査者)を選び、各人物(刺激人物)がどのような人であるか、ランダム順に、被験者に話してもらう。

5名の刺激人物のうち3名は毎回同じ刺激人物であり(話している当人以外の、本研究に参加している被験者3名)、残り2名は毎回異なる刺激人物である。この2名は、他3名の刺激人物が毎回選ばれていることに気付かれないためのダミーとして選択されている。つまり3名の刺激人物については毎回必ず被験者に話してもらうようになっており(但し被験者が名前を挙げなかった場合は除く)、実際に分析するのはこの3名の刺激人物のデータである。

また、被験者に刺激人物について話してもらう際、“その人(刺激人物)についてあなた(被験者)が知っていること、思ったこと等、私(面接者)がその人物を思い浮かべられるように話してください。”と教示した。面接者は、非指示的態度で被験者の話を聞くようにした。

Table 1
対人認知カテゴリ^{a)}

I 客観的情報

1. Aの外見：Aの容貌，服装，身体等，Aの外見。
2. Aのプロフィール：Aの経歴(e.g.学歴)，背景(家族，出身地)等，一般的情報。
3. Aに起きた事柄：Aの客観的行動やAに起きた事柄。

II 社会的関係

1. 他の人々に対するAの態度：“私”も含めて，他の人々に対してAだけがとった行動，反応。
2. “私”に対するAの態度：“私”だけに対してAだけがとった行動，反応。
3. Aに対する“私”の態度：Aだけに対して“私”だけがとった行動，反応。
4. Aに対する他の人々の態度：Aだけに対して“私”も含めて他の人々がとった行動，反応。
5. Aと“私”，互いの相手に対する態度：Aと“私”が互いに相手に対してとった行動，反応，どちらがどちらに対してとは一方的に言えないものを含む。

III 心理的側面

1. Aの性格：比較的安定，一貫したAの行動傾向。
2. Aの能力：スポーツや勉強等，人以外の事柄に関するAの能力。
3. Aの関心，態度，価値観：人以外の事柄に対するAの心情がわかるようなAの興味，関心，態度。
4. Aの自己概念：Aが自分の性格や価値観について述べていること。

IV その他^{b)}：Aだけに特定できない内容，A以外の人のことや，単なる状況説明。

^{a)} 刺激人物をA，認知する側を“私”と表現した。

^{b)} Aについての認知とは言えないので分析対象外とした。

2. 質問紙調査(毎回，面接終了後実施)

①刺激人物に対する好意度の評定：Newcomb (1961)が用いた尺度を使用した。0(嫌い)―50(無関心)―100(好きである)の幅で，5点刻みの21点尺度である。

②刺激人物の人生観に関する，被験者による評定：Allport-Vernonの価値観テストを用いた。10項目で構成され，評定方式は順位法である。人生観の述べてある項目を，刺激人物が自分の人生観に当てはまる順にいかにかに並び換えるかを被験者に予測させた。また，被験者自身の人生観に当てはまる順に項目を並べさせた。刺激人物と被験者の人生観の一致度を見るためである。

③刺激人物のクラブに対する態度に関する，被験者による評定：被験者に，クラブに対する刺激人物の態度の予測，および被験者自身のクラブへの態度を評定させた(12項目，5点尺度)。

④刺激人物と被験者との接触頻度，およびその内容：調査日前1週間に刺激人物と被験者が接した回数とそのときの経過し方を記述してもらった。

分析方法

サンプル数 被験者4名は，毎回同じ3名の刺激人物について語っており，この刺激人物3名分のデータ

を用いたので，計12ケースである。

他者認知の内容分析 面接調査により得られた他者認知の内容分析については，Beach & Wertheimer (1961)の対人認知カテゴリを修正して用いた(Table 1)。Beach & Wertheimer (1961)は，被験者に自分の知っているさまざまな人物に関して自由記述させた内容から対人認知カテゴリを作成している。他者についての知識全般をカテゴリ化しており，面接調査により得られた陳述を分類するのに適当と思われた。但し，Beach & Wertheimer (1961)では，性格や価値観等の“行動の一貫性”と能力や野心等の“行為と活動”とが別のカテゴリになっているが，両カテゴリとも他者の心理的側面に関するものであるため，“心理的側面”としてまとめた。また，“社会的関係”において，一方から他方へとといった一方的な社会的関係だけではなく，両方向的な社会的関係についての陳述も予想されたので，“認知者側と刺激人物，互いの相手に対する態度”のサブカテゴリを新たに付け加えた。

内容分析の手順であるが，まず被験者が刺激人物について語った内容を，一つの意味のみを含む単位に分割した(e.g. Aさんは背が高く/明るい人で/…)。次に，実験者が各単位を対人認知カテゴリに分類し，その後第三者の判定者2名に，ランダムに選ばれた129個の単位をカテゴリに分類させた。実験者を含めた判定者間の一致度は，.87，.89，.96であり，カテゴリの

Table 2
対人認知カテゴリ使用比率と好意度との順位相関係数
(スピアマンの順位相関)

被験者	刺激人物	$n^{a)}$	カテゴリ I 客観的情報	カテゴリ II 社会的関係	カテゴリ III 心理的側面
A	B	8	.551	-.125	-.529
	C	8	-.567	-.340	.845**
	D	7	-.655	-.327	.655
B	A	8	-.481	.696	.045
	C	7	.187	-.411	.505
	D	8	-.346	.247	.000
C	A	8	-.391	-.176	.252
	B	8	-.600	.702	.295
	D	8	-.352	.387	-.367
D	A	8	-.402	.102	.208
	B	8	-.786*	.102	.951***
	C	6	-.664	.655	.393
平 均			-.375 ^x	.126 ^y	.271 ^{y(b)}

* $p < .05$ ** $p < .02$ *** $p < .01$

^{a)} n は、調査回数を表す。本調査回数は全 8 回だが、被験者が刺激人物の名前を挙げなかったときは調査できなかったため、ケースによりばらつきがある。

^{b)} 各順位相関値の Z'変換値を分散分析したところ、カテゴリの主効果が見られたので、多重比較(Newman-Keuls法)を行った結果である。異なるアルファベット間に有意差あり($p < .01$)。

信頼性は高いと思われた³。従って、この対人認知カテゴリに分類された単位数を、対人認知カテゴリの使用頻度と考え、他者認知の指標とした。

対人魅力の諸要因の分析 ①被験者が認知した、刺激人物と被験者との人生観の類似性：被験者自身の人生観に関する評定と被験者が予測した刺激人物の評定との順位相関値を求めた。

②被験者が認知した、刺激人物と被験者とのクラブへの態度の類似性：被験者自身のクラブに対する態度への評定値と被験者が予測した刺激人物の評定値間の D スコアを求めた。

③接触関与度：被験者に刺激人物と接したときの内容を記述させたが、この内容を項目化し、第三者の判定者 14 名に“あなたと同じクラブに所属している A さんが各状況に置かれた場合、A さんをあなたはど

の程度理解できると思いますか。”という基準で 5 段階で評定させた。次に、各項目に対する評定値の四分位偏差を求め、四分位偏差が 1 以上の項目は散布度が大きいとして除外した。残りの項目の各中央値を各対人状況における他者との関与度(接触関与度)とし、各回ごとの接触関与度の平均値を指標として用いた。

結 果

自他関係の親密化・疎遠化の過程と他者認知との関連

本研究では、刺激人物への好意度の値が 50-90 のケースしか得られず、自他関係が嫌悪なケース(好意度が 0-45)は見られなかった。従って、以下の分析は、自他関係の親密さ・疎遠さと他者認知との関連を検討することとなる。

ケース数が少ないこともあり、関係が直線的に親密化したケースと疎遠化したケースとを明確に分類して両ケースの認知カテゴリ使用頻度を比較するのは不可

³ A, B 2 者間のカテゴリ分類の一致度

$= (\text{カテゴリ分類中, A, B が一致した単位数})^2 / \{ (A \text{ が各カテゴリに分類した単位数}) \times (B \text{ が各カテゴリに分類した単位数}) \}$

能であった。そこで対人認知カテゴリと好意度との関連を見るために、ケースごとに調査期間の第1回から第8回までの刺激人物に対する好意度と対人認知カテゴリの使用比率との順位相関を求めた(Table 2)。各回ごとの対人認知カテゴリ使用比率を指標としたのは、被験者の語る量が各回ごとに不規則であり、その違いをできるだけ少なくするためである。スピアマンの順位相関値を求めた結果、有意に高いものは少なかったが、Table 2を見ると、カテゴリ I と好意度との相関値は負のものが多く、逆にカテゴリ III と好意度との相関値は正のものが多く、そこで、カテゴリ使用比率と好意度との相関値がカテゴリにより異なることを検討するために、各順位相関値の Z' 変換値を用いて対人認知カテゴリ×被験者の2要因分散分析(岩原, 1965の混合モデル)を行った。カテゴリ要因の主効果が有意となり($F(2, 24) = 7.19, p < .01$), 多重比較(Newman-Keuls 法)の結果、カテゴリ I はカテゴリ

Table 3
対人認知カテゴリ使用比率と好意度との積率相関係数^{a)}

	カテゴリ I 客観的情報	カテゴリ II 社会的関係	カテゴリ III 心理的側面
好意度	-.370****	.053	.323***
カテゴリ I	—	-.561****	-.414****
カテゴリ II		—	-.521****
*** $p < .01$ **** $p < .001$ ^{a)} $n = 92$			

II, III よりも好意度との相関値は低いことが認められた(Table 2 参照)。

更に、対人認知カテゴリ×被験者の2要因分散分析の結果、被験者要因に有意な主効果が見られなかったため、被験者要因を無視して、各カテゴリ使用比率と好意度との積率相関係数を求めたところ(Table 3)、カテゴリ I、カテゴリ III と好意度とはそれぞれ負の相

(1-1) 刺激人物 B の場合

(1-2) 刺激人物 C の場合

(1-3) 刺激人物 D の場合

Figure 1. 対人認知カテゴリ使用比率と好意度の時系列的变化(被験者 A のケース)。

(2-1) 刺激人物 A の場合

(2-2) 刺激人物 C の場合

(2-3) 刺激人物 D の場合

Figure 2. 対人認知カテゴリ使用比率と好意度の時系列的变化(被験者 B のケース)。

注) データの欠けている回があるのは、被験者が刺激人物の名前を挙げなかったため、その人物について調査できなかったためである。(Figure 3, 4 も同様)

関、正の相関であった(但し、指標としているのはカテゴリの使用比率であるため、カテゴリ間の相関は有意であるのが当然なので、カテゴリ間の相関の有意差については検討できない)。

以上の分析から、他者への好意度と他者認知の内容との関連が見られる。他者への好意度とカテゴリⅠ、つまり他者の客観的情報とは負の相関関係にあることから、他者との関係が疎遠なとき、主に他者の外見やプロフィール等客観的情報を認知していると考えられる。一方、他者への好意度とカテゴリⅢつまり心理的側面とは正の相関関係にあることから、他者との関係が親密なとき、主に他者の心理的側面を認知していることがうかがわれる。

更に、自他関係の親密化・疎遠化の過程と他者認知内容の変容との関連、および認知カテゴリ間の関連を検討するため、個々の事例を検討した(Figure 1-4)。

まず、Figure 1-1, 1-2, 3-1, 3-3 は、終始他者への好意度が高い“親密度高安定型”のケースである。4ケ

ースとも多少の変化はあるが、終始カテゴリⅢ“心理的側面”の使用比率が多く、カテゴリⅠ“客観的情報”の使用比率が少ない傾向にある。但し、Figure 1-1に関してはカテゴリⅠ、Figure 3-1に関してはカテゴリⅢの変動が比較的大きい。また、Figure 4-1, 4-3の“親密度低安定型”においても同様の変動が見られる。本研究で用いた数値の連続体である量的な好意度尺度ではとらえきれなかった二者関係の変化があった可能性も考えられ得る。

次に、Figure 1-3 は知り合った初期の段階から中盤にかけて好意度が上昇するが、後半には好意度が下降し、最後は名前も忘れられてしまったケースである。初期から第5, 6回目まで好意度の上昇とともにカテゴリⅢ“心理的側面”の使用比率が多くなる一方、カテゴリⅠ“客観的情報”の使用比率は減少していく。しかし後半、第7回に好意度がわずかに下がり第8回には名前が出てこない状態になっているが、このとき、カテゴリⅢ“心理的側面”の使用比率は減り、カテゴリⅠ“客観的情報”とカテゴリⅡ“社会的関係”

(3-1) 刺激人物 A の場合

(3-2) 刺激人物 B の場合

(3-3) 刺激人物 D の場合

Figure 3. 対人認知カテゴリ使用比率と好意度の時系列的変化(被験者 C のケース)。

(4-1) 刺激人物 A の場合

(4-2) 刺激人物 B の場合

(4-3) 刺激人物 C の場合

Figure 4. 対人認知カテゴリ使用比率と好意度の時系列的変化(被験者 D のケース)。

の使用比率は増加する。

Figure 2-2, 2-3, 3-2, 4-2 は、知り合った初期から後半にかけて次第に好意度が下がっていく“親密度下降型”のケースである。Figure 2-3, 3-2, 4-2 では好意度の下降とともに、まずカテゴリ II “社会的関係”、次にカテゴリ I “客観的情報”の使用比率が増えていく。特に Figure 4-2 のケースでは、カテゴリ III “心理的側面”の使用比率が好意度の低下とともに減少している。

被験者自身の認知傾向が顕著なのは、被験者 B (Figure 2) のケースである。他の被験者に比べ、刺激人物との好意度にかかわらずカテゴリ III の使用比率が低く、カテゴリ II の使用比率が高い。特に、3 名の刺激人物のうち最も好意を感じている A の場合 (Figure 2-1)、カテゴリ II の使用比率の変化が好意度の変動と一致している。被験者 B にとって、親密な関係にある他者とは、どのような社会的関係を形成している人物であるかという意味をもつ存在であると推測される。

以上、少数のケースではあるが、付き合いの長さにかかわらず他者との親密な関係にあるときには、他者についての主な認知内容は心理的側面であり、外見などの客観的情報はかなり少ないことが推測される。

一方、親密だったのが疎遠化していく関係にあるときには、親密だった当初その人物の主な認知内容は心理的側面であり客観的情報はわずかであったのが、疎遠化するにつれて逆転し、主な認知内容は外見やプロフィールなどの客観的情報であり心理的側面はほとんど認知されていないことがうかがわれる。

以上の分析結果より、好意度を他者との関係の親密さの指標とするならば、まず第 1 に、付き合いの長さによってではなく、そのときどきの自分と他者との関係の親密さによって他者について認知している情報の質が異なることが推測される。他者との関係が親密であるとき、他者の行動の原因として心理的側面について考える。その結果、他者を表象する際に、もちろん外見やプロフィールなど客観的情報を知っているにもかかわらず、客観的情報は他者を表象するのに大した意味はもたず、主に他者の心理的側面により他者が表象されると推測される。

第 2 に、自他の関係の親密さが変化すれば他者について認知している情報の質も変容すること、特に他者との関係が親密なものから疎遠なものへと変化していく場合、他者についての主な認知内容が、心理的側面から客観的情報へと変容していくことがうかがわれた。他者との関係が疎遠化したとき、他者の行動を安定した原因である心理的側面に帰属せず、他者の心理的側面を考えないことによって、相手の存在を無視す

る。その結果、親しかったときには認知していた心理的側面は顕在化されなくなり、客観的情報により他者を表象することになると推測される。

主体と他者との親密である、Heider (1958) の言う肯定的関係にあるとき、他者を、その人なりの心理的特徴をもつ存在とみなす点は、Heider (1958) の理論と一致するところであった。が、本研究では、主体と疎遠である関係、Heider (1958) の言う否定的な関係にある他者についての認知は、Heider (1958) の仮説とは異なり、心理的側面よりも、主に客観的特徴を認知していることが示唆される。

他者認知と対人魅力の諸要因との関連

対人認知カテゴリと好意度との関連を検討したときと同様の方法を用いた。

まず、第 1 回から第 8 回までの対人認知カテゴリの使用比率と各要因との順位相関値を Z' 変換し、カテゴリ $\times$ 被験者の 2 要因分散分析 (岩原, 1965 の混合モデル) を行ったところ、被験者と刺激人物との認知されたクラブへの態度の類似性 ($F(6, 24) = 3.15, p < .05$) と人生観の類似性 ($F(6, 24) = 4.16, p < .01$) に有意な交互作用が認められた。態度の類似性の認知が他者認知のどの側面に結び付くかは被験者により異なることがうかがわれる。また、被験者と刺激人物との接触頻度に関してはカテゴリの主効果 ($F(2, 24) = 4.46, p < .05$) が有意であった。多重比較 (Newman-Keuls 法) の結果、カテゴリ II, III, I の順に有意に大きい値となり、接触頻度が刺激人物の社会的関係についての認知に特に結び付いていることが推測される。接触関与度に関しては、主効果、交互作用ともに有意な結果は得られなかった。

最後に、対人認知カテゴリ使用比率と対人魅力の各要因との積率相関係数を求めたところ、有意な値は認められなかった。

以上の結果からは、他者認知と対人魅力の諸要因との関連について明確な結論は出せないように思われる。

まとめと残された問題

本研究では、自他の関係の親密さによって他者認知の異なることを検討するため、親密さの時系列的な変容と、それに伴う他者認知の変容を面接法を用いて調査した。その結果、付き合いの長さにかかわらず、自他の関係が親密なとき、他者認知の内容は他者の心理的側面が主であった。このとき、認知の主体側にとって他者は心理的側面をもつ存在であると思われる。一方、自他の関係が疎遠なとき、他者認知の内容は他者の客観的特徴が主であった。このとき、主体にとって

の他者は客観的特徴しかもたない物理的存在と同義であると示唆される。更に、自他の関係が親密だったときには他者認知の内容は他者の心理的側面が主であったのが、この関係が疎遠になると、他者の認知内容には心理的側面はほとんど見られなくなり、その代わり客観的特徴が多くを占めるようになる。以上、付合いの長さにかかわらず、そのときの自他の関係の親密さにより他者認知は異なることが示された。親密な関係にあるとき、心理的側面をもつ存在として他者を見るのであって、他者の立場を取得したり理解することは訓練や生得的なものではないこと、すべての他者を心理的側面をもつ一個人として認知するのではないことがうかがわれる。

本研究で以上のような知見が得られたが、問題点も多い。今後の課題と併せて、以下、いくつか述べる。

第1に、なぜ、親密なときには他者の心理的側面を認知しているのに、疎遠になると、認知していた心理的側面は顕在化せずに客観的情報のみ認知されるようになるのかという点である。親密といっても、相手との相互作用がない、自分からの一方向的な関係の中で親密さを感じたときは、相手からの働きかけを予測し統制する必要はないので、他者の行動の原因を内的要因に帰属する必要もない。その結果、心理的側面的情報が他者認知の多くを占めることはないであろう。しかし、互いに相手と接したいあるいは接しざるを得ない、いわば相互依存性の高い関係の中から親密さが生じる場合もある。このような関係を形成せざるを得ないときは、他者の行動を予測し統制せざるを得ないため、他者の行動の原因を安定した内的要因に帰属する。その結果、他者の心理的側面を主に認知すると考えられる。一方、相互依存性の低い、疎遠な関係になってしまうと、他者の行動を予測し統制する必要がないので、客観的情報のみ認知することになると推測される。本研究で示した自他関係の親密さが、自他関係の相互依存性の高さによることを確認する意味でも、今後、自他関係の相互依存性の高さが他者認知を規定することを検討する必要がある。

更に、以上の必要性も含めて、仕事のパートナー等、自分の意志で相手を選ぶことができないが接しざるを得ない関係が、他者認知に及ぼす効果を検討する必要がある。というのも、肯定的な関係と否定的な関係を形成する際に好き嫌いの感情だけで関係の方向性を規定していくと、同じクラスの子でも仲良しの子でなかったり、自分とは違う面をもつ子を否定的な関係として自分とは区別し、“モノ”と同じ扱いをすることになる。本研究で得られた知見が親密な関係以外の相互依存性の高い関係全般に言えるならば、自分では構成員を選べない共同集団における他者(仕事の

パートナーや同級生)と相互依存性の高い関係を形成、あるいは認識する機会があれば、自分とは異なる側面をもつ他者の心理的側面について理解可能となり、“モノ”扱いしなくなるのではないかと推測される。しかし、最近はこのような関係を認識できない傾向、形成する機会の減少が特に強まっていると感じられる。好き嫌いに関係なく相互依存性の高い関係を形成する経験が、他者の役割取得や自己の確立に必要であることを今後検討していきたい。

第3に、事例数が少なかったため、一般性を欠くのではないかという点である。ケース数を増やし、自他の関係が親密化したケースと疎遠化したケースを分類して、両ケースに他者認知の内容に違いが見られるか検討することが必要であろう。

第4に、対人認知カテゴリの構成の点が挙げられる。今回は Beach & Wertheimer (1961)の対人認知カテゴリをほぼ踏襲したが、例えば“心理的側面”のカテゴリの中に“他者の能力”が含まれている。“勉強ができる”、“スポーツが得意”等は客観的情報とも考えられないこともない。人がどのような側面を“心理的側面”とみなしているのか考える意味でも対人認知カテゴリの妥当性を検討すべきと思われる。

第5に、今回は他者認知を調査したが、今後、その認知に至る内的プロセスである帰属過程についても調査し、自他関係により帰属過程が異なることを検証し、Heider (1958)の帰属理論と比較する必要がある。

第6に、自己認知と他者認知との相互関連性が挙げられる。Lewis & Brooks-Gunn (1979)によれば、自己認知と他者認知とは相互規定的であると言う。本研究の結果が、相互依存性の高い関係の中から生じたものであるとすれば、相互依存性の高い関係でなければ、相手および自分自身の心理的側面は認知できないと推測される。他者から受ける不快を低減できるからといって他者と疎遠な関係ばかり形成し、他者を物理的存在として認知していると、結局は自分も物理的存在になってしまうことが考えられる。今後、自他関係の相互依存性の高さと自己認知および他者認知との相互関連性を検討する必要性が示唆される。

最後に、対人認知の発達の再検討の必要性である。村山(1977)は、6—14歳児に、好きな人・嫌いな人・自分についての人物像を自由記述させた。その結果、年齢が上がるにつれ、他者の心理的側面について多く記述しており、認知的に脱中心化する年齢にならないと他者の役割取得には至らないと説明している。しかし、本研究の結果から推測すれば、たとえ認知的には脱中心化に至っていない未発達な年齢の幼児でも、仲良くしていたり、一つのおもちゃを取り合っていると

きなど、自他関係の相互依存性が高いときには、他者の気持ちや考えを把握している可能性もあり、Dunn (1988)も指摘しているところである。ただ、年齢的に言語で表現できないと思われるので、本研究の結果が対人認知の発達にも応用可能か検討するためにも、幼児を対象にした場合の調査方法の再検討、例えばDunn (1988)の行った自然観察法等が必要とされる。

引用文献

- Altman, I., & Haythorn, W. W. 1970 The ecology of isolated groups. In H. M. Proshansky, W. H. Ittelson & L. G. Rivlin (Eds.), *Environmental psychology: Man and his physical setting*. New York: Holt, Rinehart & Winston. Pp. 226-239.
- Altman, I., & Taylor, D. A. 1973 *Social penetration: The development of interpersonal relationships*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Beach, L., & Wertheimer, M. 1961 A Free response approach to the study of person perception. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **62**, 367-374.
- Cottrell, N. B., Wack, D. L., Sekerak, G. J., & Rittle, R. H. 1968 Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of Personality & Social Psychology*, **9**, 245-250.
- Dornbusch, S. M., Hastorf, A. H., Richardson, S. A., Muzzy, R. E., & Vreeland, R. S. 1965 The perceiver and the perceived: Their relative influence on the categories of interpersonal cognition. *Journal of Personality & Social Psychology*, **1**, 434-440.
- Dunn, J. 1988 *The beginnings of social understanding*. Oxford: Blackwell.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.
- Henchy, T., & Glass, D. C. 1968 Evaluation apprehension and the social facilitation of dominant and subordinate responses. *Journal of Personality & Social Psychology*, **10**, 446-454.
- 今川民雄 1984 パーソナリティ認知の追跡的研究(1)——パーソナリティ認知構造の安定性について——対人行動学研究, **3**, 1-11.
- 岩原信九郎 1965 教育と心理のための推計学 日本文化科学社
- Lewis, M., & Brooks-Gunn, J. 1979 *Social cognition and the acquisition of self*. New York: Plenum Press.
- 村山久美子 1977 自由記述に現われた対人認知の発達の研究(2) 心理学研究, **49**, 303-309.
- Newcomb, T. M. 1961 *The acquaintance process*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Weiss, R. F., & Miller, F. G. 1971 The drive theory of social facilitation. *Psychological Review*, **78**, 44-57.
- Zajonc, R. B. 1965 Social facilitation. *Science*, **149**, 269-274.
- Zajonc, R. B. 1980 Compresence. In P. B. Paulus (Ed.), *Psychology of group influence*. Hillsdale, New Jersey: Erlbaum. Pp. 35-60.

——1993. 11. 6 受稿, 1994. 5. 7 受理——